

私小説 ― かけない言葉 ―
「眉山」(太宰治)より

藤田ヒロシ

《登場人物》

僕

里村／女客

トシ

男客1／橋田

男客2／川上

女将

○居酒屋「八十八夜」

下手にカウンター、椅子は三つ。その奥に二階に続く階段口。中央と上手にテーブル、椅子は二つずつ。店の入り口は上手奥になり、お手洗いは中央奥となる。

数人の酔っ払いの笑い声が聞こえる。その中に一段高い女将の笑い声が混ざっている。

のれんを持って里村が店に入ってくる。階段口へ行き、

里村 (二階に向かって) 女将さん！のれん下げました！

笑い声。

里村 女将さん！のれん—

女将 ありがとう！お酒二本。熱燗で—ちよっと遠藤さん—お願いね。

里村 はい。

と、一度奥へのれんを置いて後、カウンター内に入りお酒の準備をする。

笑い声。

男客1 (声) 結局のところ、いつの時代も「持っている者」が強い。そして—

男客2 (声) 強いは正義だってことですよねえ。

里村の手が一瞬止まる。

その時、店の扉が開く。

里村 (入口を見ないまま) あ、今日はもう終わりです。

と、顔を上げると僕が立っている。

僕 終わり？

里村 (無愛想に) のれん出てなかったでしょ…：…気にしてないか。

笑い声。

僕 (上を指差す)

里村 女将さんのお客。てか、あの人たちが居るから早仕舞なの。お陰で帰れるけど、その分稼ぎがないわ。そう言うわけだから今日は諦めて他所行って下さい。

女将 (声) 里ちやあん。

里村
はい。今お持ちします。（お酒を盆に乗せて）これ出しだら私は帰るの。

と、お盆を持って二階へ。

里村（声）
お待たせしました。

男客1（声）
お、着た、来た。

女将（声）
ありがとね。

里村（声）
それじゃ、これを片づけたら失礼します。

その間「さて、どうするか？」と思索した僕。何かを思いついたよ
うで、カウンター席に座る。

そこにお盆に空いた器なのを乗せて戻ってくる里村。

里村
聞いてました？もう店じまいですよ。これ片づけたら私、帰りますから。お客さんも他所へ。

と、カウンターの中に入って片づけをする。

僕
物は相談だが—

里村
聞きません。

僕
（一呼吸置いて）酒を出し、そいつを空けるまで居てくれたら、酒の代金と君の給金、その両方を僕が払おう。

里村
（黙って片づける）

僕
どうだ？

里村
（黙って片づける）

僕
悪い話じゃないだろ？

里村
（ぼざり）出た。

僕
ん？

里村
見下してる。

僕
何がだ？酒を飲みたい僕と稼ぎたい君との取引じゃないか。対等
だろ？

里村
見下していてもいいんですよ。全然問題ないんです。問題なのは
自覚がないって事ですよ……先生。

と、僕の前に酒を出す。

僕
（驚きで声が出ない）

里村

お客さん、どうしました？お望みのお酒ですよ。

僕

…：嗚呼、ありがとう。それじゃ、交渉成立ということだな。

と、酒をお猪口に注ぐ。

里村

ツケはなしですよ。

僕

（お猪口を掲げ、一口飲む）

里村

素性が知られていないと思っていました？

僕

…：…。

里村

小説家の先生と知ったら大抵の人間はオイシイ思いをしようと擦り寄りますからね。

僕

いつから？

里村

最初に来た時から。

僕

こりや驚いた。

里村

正確には、帰った後で。（上を見て）あの女将さんがツケでいいなんて…：よっぽどの人でないと思うはなりませんからね。

と、小皿にのった漬け物を出す。

里村

これはお代には入れません。

僕

今日は擦り寄るのかい？

里村

代わりに私の給金を倍額で。

僕

（酒を飲む手が止まる）

里村

悪い話じゃないでしょ？

僕

こりや驚いた。

と、漬け物を摘み、それを里村にみせる様にしてから、

僕

女つてのはやっぱ怖いね。生まれつきのものなのかね。男と女じゃハナから作りが違うんだろうな。

と、口に入れ、酒で流し込む。

里村

女が怖いんじゃないよ。怖いののは、お金。女も男も関係ありませんよ。

と、カウンター越しに酌をする。

僕

（酌を受ける）

里村

(お銚子を置いて) 帰る時は声かけて下さい。

と、奥に消える。

ひとり酒を飲む僕。

笑い声。

持って来ていた茶封筒から原稿を取り出す僕。酒を飲みながらそれに目を落とす。

笑い声。

○若松屋(小説内の世界)

二階から声がしてくる。

男客2(声)

男も女も関係ありませんよ。そもそも基本的人権というのは—

トシ(声)

え?!それは、どんなんです?

男客1(声)

はあ?

トシ(声)

やはり、アメリカのものなんですか?いつ、配給になるんです?

間

男客2(声)

トシちゃん、俺たちが話している人権ってのはヒューマンライツって言うって、政府が配給するってもんじゃないんだよ。もちろん、アメリカのものってわけでも—

トシ(声)

ひゅ、ひゅうま、らい……?

男客2(声)

ヒューマンライツ。

トシ(声)

ひゅうまんら—

男客1(声)

知らないのに話に入ってくるな。

トシ(声)

だって、教えてくれないんですもの。

男客1(声)

だから、入ってくるなって!

男客2(声)

トシちゃん、下にお客さんが来ているらしいぜ。

トシ(声)

構いませんわ。

男客1(声)

そういうことじゃないだろ……。

奥から女将が出て来て、階段口に向かって、

女将

トシちゃん!トシ!

男客2（声） ほら。

トシ（声） ふん。

ドタドタと足音を立ててトシが現れる。

トシ あら、いらっしやい。

と、僕に発したかと思うと、勢いそのままにお手洗いに入っていく。

女将 こら、トシちゃん！！（僕に）すみませんねえ。

と、苦笑いで奥に消えてゆく。

男客2（声） いかにも、ひどすぎますよ。この店も悪くはないが、どうも

アレがいるんじゃない。

男客1（声） あれで案外、自惚れているんだぜ。僕たちにこんなに、嫌われて

いるとは露知らず、かえって皆の人・気・者。

笑い声。

○居酒屋「八十八夜」

カウンターで原稿に目を落としている僕。

僕 （原稿を一枚めくり） ……たまらねえな。

と、お酒を煽る様に飲む。

里村（声） 何か言いました？

僕 （反応しない）

里村 （出て来て）呼びました？

僕 あ、嗚呼、独り言だ。仕事の邪魔したな。

里村 （笑う）

僕 おかしなこと言ったか？

里村 ええ、言いました。

僕 ……おかしな奴だ。

里村 何かあったんです？あ、何かあったにしても、あまりフツ―な事言わないでくださいね。

僕 は？

里村 おかしくて、うっかり心配しちゃいます。

僕 (鼻で笑って) 何だそれ。

と、原稿を一枚めくる。

里村 それ、もしかして次の作品ですか？

僕 ……ん、うーん。

里村 違うんですか？

僕 どうだろうな。

里村 そうして下さいよ。女将さん喜びますから。

僕 女将が？

カウンターの下から文芸誌を取り出す里村。

僕 こりや、驚いた。一度もそんな話—

里村 読んでは無いですよ。見てるんですよ。先生のお名前が載ってやしないかと見てるんですよ。

僕 ……。

里村 見られているんですよ。怖いですね。

と、じっと僕を見る。

僕 ツケか！僕に金が入るかどうかを、文芸誌をみて確認しているのか？毎月。

里村 毎月。

僕 怖いねえ。

と、酒を飲む。

里村 決まった日にお給料が入るわけでも、現金商売をしているわけでもない。有る時はたんまり、無い時はさっぱり。だからツケなんでしょうけど、女将さんからしたら、ねえ……。ほらお金って怖い。

僕 入った時にはきっちり精算してるぜ。

里村 水もの、でしょ？だから書けるうちに書いて、出せるうちに出して下さい。

と、酌をする。

僕 (それを受け) なんだか、とんでもなく高い酌に思えてきた。

里村 (笑って) あら、やだ。今のは純粹な読者の思いですよ。

僕 (酒を飲む手が止まる)

文芸誌のページをめくり、目を落とす里村。
それをじっと見る僕。

里村 (目を落としたまま) 信じてないですね。

僕 (酒を飲んで) そんなことはないさ。

と、原稿に目を落とす。

笑い声。

女将 (声) うれしい。正義の味方ね。

男客1 (声) そうですよ、女将さん。俺は正義の味方ですよ。

男客2 (声) 俺たち、でしょ？

男客1 (声) (同時に) お前は違うだろ！

女将 (声) (同時に) あんたは違うでしょ！

笑い声。

里村 (小声で) 女将さん、酔ってるな。

僕 読んでみるかい？

と、原稿をカウンターの上に置く。

里村 へ？

僕 今ここで読むなら—

里村 私で試そうってわけですか？ああ、私を試すのか。

僕 そんなつもりじゃねえよ。

里村 なら、どんなつもりなの？

僕 このまま明日編集者に渡すのが…：気が乗らないだけだ。

里村 それ、どう違うの？

僕 違うさ。

里村 (本当に？といった顔)

僕 無理強いはしないよ

と、原稿に手をかけようとするが、

里村 断っちゃいませんよ。

と、原稿を手にして、

せつかくなんで、ご相伴しよばんに。

カウンターから出てきて、僕の隣に座る。

では、読ませて頂きます。

と、一礼して読み始める。

里村
これは、例の飲食店閉鎖の命令が、未だ発せられない前のお話である。

新宿辺も、こんどの戦火で、ずいぶん焼けたけれども、それこそ、ごたぶんにもれず最も早く復興したのは、飲み食いをする店であった。帝都座の裏の若松屋という、バラックではないが急ごしらえの二階建の店も、その一つであった。

「若松屋も、眉山がいなけりやいいんだけど」

「イグザクトリイ。あいつは、うるさい。フウルというものだ」

笑い声。

里村が読み始めると、酒を手にテーブルへ移動する僕。

○若松屋（小説内の世界）

カウンターに女客。

テーブルで飲んでいる僕。お手洗いから出てくるトシを見つけて、

僕
トシちゃん、また御不浄か？

トシ
あら、いらっしやい。今日はお一人？

僕
……。

トシ
お一人？

と、テーブルに近づいてくる。

僕
いいのかい？また女将に叱られずぜ。

トシ
大丈夫ですよ。慣れっこですから。

僕
……。

トシ
あ！お待ち合わせでしょ？そうなんですよ？今日の方はどんな方ですか？やはり小説家の方ですか？ねえ、どなたです？

僕
（めんどくさそうに）誰だっさいいだろ。

トシ
ええ、教えてくれたっていいじゃないですか！だって私は—

僕
三度の飯より小説が好き。

トシ
はい！

僕
（じっとトシを見る）

トシ
ど、どうしたんです？顔に何か—

女将（声）
トシちゃん！

トシ
……。

僕
呼んでるぜ。

女将（声）
トシちゃん！

トシ
う、もう！はい！

と、カウンター奥に消えてゆく。

女将（声）
あんた、何処行つてたんだい？

トシ（声）
御不浄に。

女将（声）
そればかりだね。

入口が開き、川上が入ってくる。

川上
（僕を見つけて）もう来てましたか。

僕
申し訳ない。先にやっています。

と、お銚子を振る。

川上
構いませんよ。筆が進みませんか？

僕
ええ、まあ。

川上
その分、酒は進む。

僕
まいったな。

川上
わかります。生み出すってそう言うものですよ。

僕
（席を立ち）上、行きましょう。

川上
上？

僕
私の巣ですよ。

と、川上を案内する様に階段口に進むと、トシが出て来て、

トシ
いらつしやいませ。

(会釈する)

川上
僕
トシちゃん、上に酒を頼むよ。

トシ
はい。お二つで？

それに頷いて階段口に消えてゆく僕と川上。

カウンターで酒の準備をするトシ。

トシ
お客さんもお待ち合わせで？

女客
え、ええ。

トシ
何か差し上げますか？

女客
……。

トシ
お連れさんを待ちますか？

女客
ええ、そうさせてもらいます。

トシ
はい。

と、酒の準備をして、

トシ
失礼します。

と、盆を持つが、それを一端置いて、

トシ
もしよかったら。待つ間の時間つぶしにでも。

と、文芸誌を取り出して女客の前に置き、盆を持って階段口に消える。

トシ (声)
僕！お待たせしました！

トシの置いた文芸誌を手にする女客。それをぱらぱらとめくる。

戻ってくるトシ。

トシ
お好きですか？

女客
これはあなたの？

トシ
えエ、まア……。

女
小説好きなの？

トシ
えエ、まア……。

女客
そうなんだ……。

と、文芸誌に目を落とす。

トシ
お客さん。

女客
（目を落としたまま）なに？

トシ
おかしいですか？

女客
（目を落としたまま）なにが？

トシ
私が「小説が好き」ってことが。

女客
（目を落としたまま）……。

トシ
おかしいですか？

女客
（ハツと顔を上げて）おなじくなんかないですよ。ちつとも。

トシ
ちつとも？

女客
はい。

トシ
よかった。

と、その時、僕が急ぎ足で降りてくる。御不浄の様だ。それに気が付いたトシは階段口に行って声をかける。

トシ
ねえ、あの方どなた？

僕
と、階段を見上げる。

僕
誰だっというじゃないか。

と、トシをよけようとするが、

トシ
どなた？

僕
と、立ちはだかる。

僕
うるさいな。

トシ
どなた？

僕が避けようとする、立ちはだかるトシ。

トシ
ねえ、どなー

僕
川上っていうんだよ。

と、吐き捨てる様に、トシの横を抜けてゆく。

トシ
（小声で）カワカミ……嗚呼、わかった！川上眉山！

お手洗いの入口まで来ていた僕が立ち止まり、女客もトシに目をやる。

僕 馬鹿野郎！

と、お手洗いに消える。

呆然とするトシ。

それを見て、ゆっくり立ち上がり、声を掛けようと近づく女客。

女客 あのね「川上眉山」っていうのは――

トシ (小声で) 馬鹿。

女客 え？

トシ 馬鹿、私、馬鹿だ。

と、カウンターの中に小走りで動きながら、

トシ 遅いですね、お連れさん。やはり、何か差し上げましょうか？

女客 あ、いえ……。そうですね。お酒は流石にあれなので、もうしわけないけど、お茶を一杯お願いできますか？

トシ はい。

と、奥に消えるトシ。

席に戻る女客。

僕 お手洗いから出てくる僕。テーブルに残したお銚子の残りを確認する。ほんの少し残っていたそれを飲みながら、

僕 それ以来、僕たちは、面と向えば彼女をトシちゃんと呼んでいたが、陰では、眉山と呼ぶようになった。そうしてまた、若松屋の事を眉山軒などと呼ぶ人も出て来た。

と、階段口に向かう途中で女客に目をやる。

その視線に気が付き会釈をする女客。

僕 こんばんは。

女客 ……こんばんは

僕 もしよければ、一緒に、どうです？

と、階段を見上げる。

女客 人を待ってますので。

僕 (何度か頷き)それは失礼しまー(文芸誌を目にし)それは？あなたなの？

女客 え、あ、これは……。女中さんのものかしら？

僕 女中？

女客 待つ間の時間つぶしに、と貸してくれたんです。

僕 店の物か、客の忘れ物でしょう。びざー女中の物ってことはない。

女客 どうして？

僕 あの子は……もう少しこの店に通えばわかりますよ。

と、階段口に消える。

笑い声。

○居酒屋「八十八夜」

カウンターで原稿を読み進めている里村。

里村 眉山の年齢は、はたち前後とでもいうようなところで、その風采ふうさいは、背が低くて色が黒く、顔はひらべったく眼が細く、一つとしいいとこが無かったけれども、眉だけは、ほっそりした三ヶ月型で美しく、そのためにもまた、眉山という彼女のあだ名は、ぴったりしている感じであった。

けれども、その無智と凶々しさと騒がしさには、我慢できないものがあつた。下にお客があつても、彼女は僕たちの二階のほうにばかり来ていて、そうして、何も知らんくせに自信たつぷりの顔つきで僕たちの話の中に割り込む。例えば、こんな事もあつた。

二階から。

男客1（声） 基本的人権というのは――

僕（声） それは、どんな物なんだ？やはり、アメリカのなんだろうな？それでいつ、配給になるだ？

女将（声） （笑って）先生、なんです？もう酔ってるんですか？

声を聞き、辺りを見渡す里村。僕が二階に行っている事に気が付く。

僕（声） 女将。僕はねえ……酔いたいよ。

女将（声） どうしたんです？

声2（声） ああ！わかった！

女将（声） なんです、急に。もう。

声2（声） ヒューマンライツの「人権」とレーヨンの「人絹じんけん」を掛けた冗談！
ですわね！

女将（声） ああ。

声2（声） それに—

男客1（声） それを「アメリカの」もので「配給」されるとは、なんともシニカル。いやあ、先生がこんなに面白い方とは思いませんでしたよ。今夜は最高だ。さあ、どうぞ、どうぞ。

僕（声） いや、僕はこれで。お邪魔した。

二階の会話に聞き耳を立てていた里村。僕が降りて来る気配に、原稿に視線を戻す。

降りてくる僕。

僕 なるほど女将が好きそうな客だ。

里村が視線を向けると、手で円マークを作ってみせる僕。

里村 大口のツケより小口の現金が有りがたいご時世に、大口の現金ですからね。それはもう。

僕 ……。

里村 上に行ったの気付きませんでしたよ。

僕 うん。

と、気のない返事をして、テーブルにつく。お銚子は空。

里村 飲み足りないですか？

と、席を立ちカウンターへ。

僕 冷でいい。

里村 はい。

と、酒を準備する。

里村 「若松屋」に「トシ」なんて名の女中いました？

僕 ……。

里村 前の話だから、私が知らないだけか。ああ、小説ですものね、本当の名前、本当の事ってわけじゃない。そう言うことですね。

と、お酒を僕のところへ運んでくる。

僕 ありがとう。

と、すぐにお猪口に注ぐ。

空のお銚子を下げ、カウンター席に戻る里村。

僕 読んだのは半分くらいか？

里村 え、ああ（原稿を確認して）そうですね。

僕 まずは全部読むことだな。

里村 ……そうですね。

と、原稿に目を落とす。

笑い声。

僕 （舌打ち）

里村 （それに目をやる）

○若松屋（小説内の世界）

テーブルで飲んでいる僕とカウンターに座っている女客。

階段から声が降りてくる。

男客2（声） なんでも、あれは、貴族—

男客1（声） へえ？それは初耳だな。

男客1と男客2が階段口から現れる。

男客2 その貴族の一件でね、あいつ大失敗をやらかしたんですよ。誰かが、あいつを騙して、本物の貴婦人は、おしっこをする時、しゃがまないものだとか教えたのですね、すると、あの馬鹿が、こつそり御不浄で試して……いやもう……四方八方に飛散し、御不浄は海、しかもあとには、知らん顔。

お手洗いの入口で足を止める男客1。

男客2 女将さんはてつきり僕たち、酔っぱらいがやったと思ったようですが、いくらなんでもあんな大洪水の失礼は致しませんからね、それで、いろいろ詮索の結果、眉山でした、あっさり白状したんです、御不浄の構造が悪いんだそうです。

静寂。

男客1 お前が先いけ。

と、通り道を空ける。

男客1 遠慮するな。

男客2 それじゃ、先に。

と、少し緊張した様子でお手洗いへ。

男客2（声） 大丈夫です！

男客1 どうしてまた、貴族だなんて。

男客2（声） 今の、流行言葉じゃないんですか？何でも、眉山―おっと、あぶね―

男客1 おいおい。

男客2 大丈夫ですよ。何でも眉山の家は、静岡市の名門で―

僕 名門？ピンからキリまであるものだな。

と、会話に割って入る。

男客1 こちらにいたんですか？どうして……。

と、テーブルに寄ろうとするが、カウンターの女客に気が付き、足を止め、

男客1（男客2に向け）まだか？

男客2（声） 急かさないうで下さいよ。眉山の大海になっちゃいますよ。

男客1 それは簡便だ。

男客2（声） そうでしょう。

と、しばらくして出てくる。すぐさま入る男客1。

男客2（僕を見つめ）あ。どうして？

と、テーブルに近づき、

男客2 もう、河岸をかえましょうよ。いい潮時ですよ。

僕（ちらり女客を見る）

男客2（それに気付き、声を抑さえ）他にどこか、巢を捜しましょうよ。

僕 そう言っても此処に戻ってくるだろ。

男客2 大海ですよ。大海。今度こそ。

僕 大丈夫なのか？

と、手で円マークを作ってみせる。

男客2 ……。

僕 だろ？

男客2 探すだけでも。

僕 ……時々他も覗いてみるか。

お手洗いから男客1が出てくる。

男客1 よし、戻るぞ。

男客2 (僕に) お願いしますよ。

と、階段口へ。

男客2 新しい巢の話ですよ。

と、男客1と共に消えてゆく。

男客1 またその話か。

男客2 大海ですよ、大海。今度こそ……。

静寂。

ゆっくり席を立つ女客。

僕 (それを待っていたかのように) 今日も待ち合わせですか？

女客 ……。

応えずお手洗いに消える女客。

男客2 (声) 住んでいた家が、馬鹿に大きかったんだそうです。戦災で全焼していまは落ちぶれたんだそうですけどね、何せ帝都座と同じくらいの大きさだったというんだから、驚きますよ。(笑う)

男客1 (声) 何だよ。先を言え。

男客2 (声) 痛っ。……でね、よく聞いてみると、何、その家つてのは小学校なんです。その小学校の小使さんの娘なんですよ、あの眉山は。

笑い声。

静かになると、女客がお手洗いから出てくる。

僕 ああ、そう言う事かっ！

それに反応した女客と目が合う。

僕 あなたも見たことあるでしょ。眉山の階段の昇り降り。昇る時は、ドスンドスン、降りる時はころげ落ちるみたいに、ダダダダダ。ダダダダと降りてそのまま御不浄に飛び込んで扉をピシヤリ。

女客 (黙って席に戻る)

構わず続ける僕。

僕

一度注意した事があるんですが、眉山の奴は「私は小さい時から、しつかりした階段を昇り降りして育って来ましたから」と、けろつと言いやがった。その時、僕は女つて浅ましい虚栄の法螺を吹くものだど、呆れていたんですが、小学校の小使さんの娘なら法螺じゃありません。（一呼吸置いて）小学校のあの階段は頑丈ですからねえ。

女客

眉山の大海、ですか……人の事を良く笑えるものです。

と、お手洗いの方を見る。

僕

え？

と、つられるようにお手洗いを見る。

女客

女中の仕事は大変なものです。あなた達の様な客、私の様な客、色々な客の相手をしないとイケない。ゆつくり御不浄につてわけにはいかないでしょうね。

僕

いやあ、だとしてもですよ。眉山のアレは度を超えている。この店は悪くはないが、アレが居るんじや、いよいよ本当に――

そこで勢いよく席を立つ女客。そのまま店の出口へ。

僕

お待ち合わせでは？

女客

その辺まで来ているでしょうから、見つけて別の店に行きます。

と、出てゆく。

僕

別の、か……。

手酌で酒を飲む僕。

笑い声。

暗転

○若松屋（小説内の世界）

テーブル席に橋田。笑いをこらえ座っている。カウンター内に女将。不機嫌な様子。

女将

笑い事じゃありませんよ。

橋田

いや、女将。申し訳ない。でもねえ……。

と、笑いを必死にこらえる。

女将　ですから笑い事じゃありませんよ。私の不注意があったかもしれないですが、いくらなんでも……。

橋田　女将。前から一度聞いてみたかったんだが、どうしてびざ……トシちゃんを働かせているんだい？

女将　どうしてって？

橋田　いやあ……器量のいい子なら他にいる。違うかい？

女将　……それはそうかもしれないけどね。

と、そこに僕がやってくる。

女将　あら、今日はお早いですね。

僕　ちよつと待ち合わせだね。

女将　上でお待ちになりますか？

僕　あ、いやあ……

と、考えていると、

橋田　もう少し早く来れば面白いもの見られましたよ。

女将　もう、止めて下さいよ。

僕　面白いもの？何ですか？

と、橋田と女将の顔を見る。

女将　（無表情）

橋田　（ニヤニヤ笑い）味噌を踏んだんですよ。

僕　味噌？誰が？

と、橋田と女将の顔を見る。

女将　（無反応）

橋田　決まってるじゃないですか。

僕　眉山か！

橋田　壮観でしたよ。

と、思い出したようにニヤニヤする。

そこへ女客が入ってくる。

女客　こんばんは。

女将 あら、いらつしやい。今日は皆さん早いのね。

僕と橋田を目にし、会釈をする女客と会釈を返す二人。

橋田 (ニヤニヤしながら、僕に) 待ち合わせって？

と、女客を見る。

僕 なに馬鹿な事を。違いますよ。

橋田 (女客に) 待ち合わせですか？お連れさんが来るまで良かったら

そうです、一緒に？こちらの人はねえ、あなたも知っておると思うんだが―

僕 なに馬鹿な事を。(女客に) 失礼。

空いているテーブル席につく女客。

橋田 (小声で、僕に) いいじゃないですか。

僕 で、何が壮観だったんですか？

橋田 ああ、そうだった。その話……。

と、ニヤニヤ笑う。

僕 なんですか。

と、橋田を諦め、女将を見る。

女将 (大きく息を一つ吐いて) きょう配給になったばかりのお味噌を

お重箱に山もりにして……私も置きどころが悪かったのでしようけれど……。

(女将・橋田の回想として) トシが奥から現れ、カウンターの隅で急に立ち止まる。

橋田 眉山が外からバタバタ眼つきをかえて駈^かけ込んで来て、いきなり

僕 踏んだのか？

(女将・橋田の回想として) つま先で必死になってお手洗いに消えるトシ。

橋田 しかも、それをぐいと引き抜いて、つま先立ちになってそのまま(お手洗いの方を見て) だからね。

僕 (お手洗いの方を見る)

一瞬の間の後、僕と橋田の笑い声。

女将 どんなに、堪え切れなくなっていたって、何もそれほど慌てなく

僕 てもよろしいじゃございませんか。お便—（お手洗いの方を見て）味噌の足跡なんか、ついていた日には、お客さまが何と……。

僕 （お手洗いの方を見て）行く前でよかった。出て来た足では、たまらない。何せ眉山の大海といつてね、有名なものなんだからね、その足でやられたんじゃ、味噌も変じて糞になるのは確かだ。何だか、知りませんがね、とにかくあのお味噌は使い物になりやしませんから、捨てました。

僕 全部か？そこが大事なところだ。時々、朝ここで、味噌汁をごちそうになる事があるからな。後学の為、お尋ねする。

女将 全部ですよ。お疑いなら、もう、味噌汁をお出ししませんよ。とにかく壮烈なものでしたよ。味噌踏み眉山。吉右衛門の当り芸になりそうです。

僕 いや、芝居にはなりますまい。味噌の小道具がめんどうです。

と、笑う二人。

その後、席を立つ橋田。

僕 もうお帰りで？

橋田 （頷いて）用事があつて、その前に少し寄らせてもらったんです。お先に。

と、僕、女将、そして女客に会釈して出てゆく。

女将 ありがとうございます。

僕 で、トシちゃんは？

女将 井戸端で足を洗っています。

僕 そうかい。それじゃ、上で待たせてもらうよ。

と、席を立ち二階へ。

女将 どなたと待ち合わせで？

僕（声） 来るは初めてだが、女将も知っている顔だ。すぐわかる。

女将 もうっ。（女客に）あら、ごめんなさい。何も出さないで！

と、慌てて奥に消える。

しばらくしてトシがゆっくりとした足取りでお手洗いから出てくる。

トシ （女客を目にして）いらっしやいませ。お待ち合わせですか？お

茶お出しします？

トシさん。

はい？

大丈夫ですか？

トシ ……聞きました？

女客 ……。

トシ 大丈夫、ですよ。お茶、お待ちくださいね。

と、行こうとするが、

女客 (立ち上がり) 眉山。

トシ (止まり) 知ってます。(首を振り) 知りました。恥ずかしいこと言っちゃいました。皆さんが陰で私の事をそう呼んでいるのを知りました。仕方ないですよ。皆さんからしたら、私は何も知らない馬鹿だから――

女客 駄目！自分でそんな事言ったら駄目よ。

トシ へ？

女客 あなたは小説家の連れて来る客だから小説家だと思った。その人は「川上」という。だから「川上眉山」。

トシ でも――

女客 確かにその人は今の時代の人じゃないけど、あなたは「川上眉山」という名を知っていた。何も知らないなんて、そんなことはない。

トシ 皆さんはそう思わない。

女客 (上を見て) 好きなの？

トシ (慌てて) いや、そんな、別に、あたしは……。

女客 好きなのね。

トシ 楽しいんです。皆さんと。先生といるといろんな知らない話を聞けて、楽しいんです。半分もわからないけれど、だから笑われるけれど、楽しいんです。もっといういろいろ聞きたいって思うんです。知りたいって思うんです。だから――

と、言葉が途切れる。

奥から女将が顔を出す。そのまま立ち聞きをする。

女客 だから？

トシ 皆さんの側に、此処に居続けたいんです。

女客 ……そう。

トシ あ、お茶！これだから。

女客 待って。これ。

と、文庫本を取り出す。

女客 読み古しで悪いけど、よかつたらどうぞ。

トシ いいんですか？あ、でも…

と、一度は伸ばした手を引っ込める。

女客 知りたいんでしょう？

トシ （頷く）

女客 読めない字やわからないことがあればいつでも聞いて。

と、トシに文庫本を持たせ、

女客 それじゃ、お茶お願い。

トシ はい。お待ちください。

手元の湯呑に目を落とし、それを持って消える女将。

文庫本を大事に握り、奥に消えるトシ。

しばらくして女将が出てくる。

女将 よろしかつたらこちらにどうぞ。

女客 そうですね。

と、カウンターに移る。

女将 ありがとうございます。

女客 え？

女将 お越し頂いて。

女客 あ。

女将 これからもよろしくお願いします。

と、頭を下げる。

と、その時新たな客（中村）が入ってくる。

中村　ごめんください。

女将　いらっしゃー（言葉が途切れる）。

中村　あの、こちらにー

女将　ああ、失礼しました。いらっしゃいませ。お二階です。こちらにどうぞ。

と、中村を案内し、二人は階段口に消える。

すぐにトシが出て来て、

トシ　いま、どなたか来られました？

女客　ええ、女将さんが二階に案内されー

と、聞き終わらないうちに階段口に消えてゆく。

女客　トシさん。

笑い声。

トシ（声）　いらっしゃいませ。

女将（声）　下のお客さんにお茶は出したの？

トシ（声）　あつ。

と、トシが降りてくる音。

トシ　すみません。今すぐお茶をー

と、カウンターの奥に行こうとするが、

トシ　すみません。

と、振り返りそのままお手洗いへ。

それを見て、しばらくして席を立ちお手洗いの入口へ行き、

女客　トシさん。どこか身体が悪いんじゃないの？いくらなんでも御不浄ばかり行き過ぎだわ。一度、お医者さんに診てもらわない？よければ、私から女将さんに話してみましようか？

トシ（声）　私は大丈夫ですよ。

と、出て来て、

トシ　いまお出ししますから、お席にどうぞ。

と、カウンターの奥に消える。

トシ（声）　どうぞ、お席に！

席に戻る女客。カウンターの際に置いてある文芸誌に気が付き、それを手にする。それをパラパラと見ていると、トシが湯呑を持って戻ってくる。

トシ お待たせしました。

と、湯呑を置き、文芸誌を見て、

トシ 今日買って来たんです。先生のお名前が出てたから。

女客 ごめんなさい、勝手に。

トシ どうぞ、どうぞ。

女客 (トシを見て) 本当に好きなんですわね。

トシ (慌てて) だ、だから、そんなんじゃないやありません！

女客 でも、この雑誌を買った事は、知らせないのが良いかもしれませんよ。

トシ ど、どうして？！

女客 実はね、この雑誌には—

僕 (声) トシちゃん居るかい？

と、階段口から顔を出す。

僕 お酒を2本頼む。僕が持つて上がるから、君は来なくていい。

トシ どうして？

僕 込み入った話があるんだよ。早く頼むよ。

トシ はあい。あら、でも女将さんは？

と、準備をする。

僕 じきに降りてくるさ。

と、カウンター席に座る。

僕 (文芸誌に気が付き) それは。それも此処のですか？

女客 これは—

トシ 私のです。今日買って来たんですよ。

女客 トシさん！

トシ 本当の事ですよ。

僕 君が？それを？

トシ 先生のお名前が載っていましたよ。

僕 (声を荒げ) わかっているよ、そんなことは！そんなものを、読むもんじゃない。わかりやしないよ、お前には。無駄だよ。なんだって……よりにもよって……私の「名前が載っていた」？それじゃお前は、僕の名前の出ている本を、全部片っ端から買い集めることが出来るか？出来やしないだろう。買うのが馬鹿の証拠だ。
と、一気にまくしたて、一息ついて、

僕 (女客に) あなたも時間潰しならもっと適した物がある。

トシ ……ごめんなさい。

女客 謝ることないわ。謝るのは。

と、僕を見る。

僕 僕が？

女客 いくら自分の作品が酷評されている内容が書かれているとは言え、読んで欲しくないとは言え、いまの言い方はあまりに失礼ではありませんか。

僕 (トシに) 酒を早く。

トシ はい。

女客 ちよっとー

トシ いいんです。(僕に) すぐ用意しますね。

と、準備する。

静寂

女将が降りてくる。

女将 どうかしました？

僕 ……。

女客 いいえ。

女将 そうですか。(トシに) 大丈夫かい？

トシ はい。

女将 こつちが終わったら、手伝っておくれ。

と、奥に消える。

酒の準備を終え、盆を先生の前に置くトシ。

トシ
お待たせしました。

僕
うん。

と、盆ではなくお銚子を持つ。

トシ
私、馬鹿じゃありません。だから、あれは読みません。

僕
……。

と、無言で階段口へと消える。

それを送って、女客に会釈をして後、奥に消えるトシ。

文芸誌に目を落とす女客。

静寂

○居酒屋「八十八夜」

カウンターで里村が原稿を読んでいる。

里村
それから数日後、僕はお酒の飲み過ぎで、突然、体の調子を悪くして、十日ほど寝込み、どうやら回復したので、また酒を飲み
新宿に出かけた。

黄昏の頃だった。僕は新宿の駅前で、肩をたたかれ、振り向くと、橋田氏が微醺びくんを帯びて笑って立っている。

「眉山軒ですか？」

「ええ、どうです、一緒に」

「いや、私はもう行って来たんです」

「いいじゃありませんか、もう一回」

「お体を、悪くしたとか……」

「もう大丈夫なんです。参りましょう」

「ええ」

裏通りを選んで歩きながら、僕は、ふいと思いついたみたいな口調で尋ねた。

「ミノ踏み眉山は、相変らずですか？」

「いないんです」

原稿がそこで終わっている。

里村 え！？

と、読んだ原稿を確認してみる。

里村 終わり？……なわけないよね。

カウンターの上や下、テーブルを探してみるが、原稿の続きはない。そして、先生の姿もない。

里村 あれ？先生？

と、階段口を、お手洗い口を覗いてみるが、僕はいない。まさか、とカウンターの奥に行ってみるが、

里村 居ない……逃げた？！

と、戻って来たその時、店の入り口から僕が入ってくる。

里村 あ、居た！

先生 何だい。

里村 逃げたかと思った。

僕 おいおい、今日の支払いと引き換えにせつかく見つけた新しい菓子を捨てると思うのかい？

里村 小説家の考えは常識では測れませんからね。

僕 言ってくれるね。

里村 これですよ。原稿が途中までなんですけど、なんの趣向で？
僕 ない？そんなはずは……。

と、慌ててカウンターの原稿を確認する。

里村 それで終わりではないでしょ？

間

僕 あっ！！

里村 ! 何ですか急に……

ゆっくりと服のポケットから折り置かれた原稿を出す僕。

僕 ……ここに。

と、原稿を差し出す。

里村 なんの趣向で？

僕 ……読まないのか？

里村

読みます。

と、原稿を受け取り、カウンターに座って読み始める。

（僕の回想として）橋田が現れる。

橋田

今日行ってみたら、いないんです。あれは、死にますよ。女将から、いま聞いて来たんですけどね—

そこで言葉に詰まるが、僕は次の言葉を待つ。

橋田

あの子は、腎臓結核だったんだそうです。妙にお小用が近いので、女将がトシちゃんを病院に連れて行って、調べてもらったらその始末で、しかも、もう両方の腎臓が犯されていて、手術も何も全て手遅れで、あんまり永い事は無いらしいのですね。それで、女将は、トシちゃんには何も知らせず、静岡の父親の元に帰してやっただけなんです。

僕

…いい子でしたがね。

橋田

（頷き）今時、あんないい気性の子は、滅多にありませんよ。

（僕の回想として）ドタバタと足音を立てて二階から降りてくるトシ。カウンターの中へ。

トシ

いらっしやい。皆さんお揃いですよ。どうぞ。

と、酒の準備をしているが、尿意を催す。それを我慢しながら、続ける。

トシ

今、お酒持って行きますから。どうぞ。

笑い声。

橋田

私たちが二階に泊って、トシちゃん、お酒、と言えば、そのひと言で、何時だろうと、ハイッと返事して、ちっとも大儀がらずに起きてお酒を持って来てくれましたね。

トシ

はい！只今！

と、酒を持って二階へドタバタと上がってゆく。

僕

（つい口をついて）味噌踏み眉山。

橋田 酷い言い様ですね。

僕 あなたの命名ですね。

橋田 悪かったと思っっているんです。腎臓結核は、おしっこが、ひどく近いものらしいですからね。

ドタバタと足音を立てて二階から降りてくるトシ。お手洗いへ。

僕 眉山の大海。

橋田 貴族の立小便なんかじゃありませんよ。少しでも私たちの傍にいたくて、我慢に我慢をしていたせいですよ。階段をのぼる時の、ドスンドスンも、病気だからだが大儀で、それでも、無理して、私たちに務めてくれていたから……。

お手洗いから出て来るトシ。服が乱れている。

トシ 私ね、小さい時、トシちゃんはお便所へ一度も行った事が無いよ。うな顔をしているって、言われたものだけ。

僕 貴族なんだそうだからね。……しかし、僕の偽らざる実感を言えば、君はいつでもたったいま御不浄から出て来ましたって顔をしているがね。

トシ まあ、ひどい。

僕 いつか身なりを整えないまま、お銚子を持って来た事があつたけれども、あんなのは、一目瞭然、というのだ、文学の方ではね。どだい、あんな姿でお酌するなんて、失敬だよ。

トシ そんなことばかり……。

女将（声） トシちゃん！これ、二階に。

トシ はい。只今。

と、カウンターの奥へ消えてゆく。

里村 原稿の最後の一枚を両手で持って、

「ほかへ行きましょう。あそこでは、飲めない」

僕たちは、その日から、ふっと河岸をかえた。

静かに店の入り口から消える橋田。

僕をまじまじと見つめる里村。

終わりだ。

これで？

ああ。

カウンターに戻り、全ての原稿を重ね、

里村 小説なの？それともラブレターなの？小説家の考えは常識では測れませんね。

僕 言ってくれるね。

里村 そうですよ。最後まで読みましたからね。これが雑誌に載って、お金を払って買って、読んで。読者はどんな気持ちになるんでしょう。

僕 ……

里村 先生を笑うかしら？

僕 軽蔑もあるだろうね。

里村 冗談じゃありません。蔑まされ笑い者になって、それで苦痛の均衡を図ろうなんて、その為に読者まで巻き込んで、勝手にも程があります。何したって、どうしたって、彼女に投げつけた言葉は取り返しがつかないわけですよ。これが何円になるのか知りませんが、知りたくもないけれど、こんな短い……原稿用紙何枚？いち、にい、さん、しい—

僕 わかって—

里村 ない！全くわかってない！

僕 ……

里村 わかっているなら、此処には居ない。

僕 ……

里村 若松屋。物語のお店ではないわ。確かにあって、確かに居る。階段を上がる度、降りる度、お手洗いにいく度、「ありがとう」でも「ごめんな」でも「好きだったよ」でも、言葉にしていなくても

う一つのあなたの気持ち言葉を言葉にして、何度も何度も何度も、何度もよ。そこで呑んだお酒よりもっとよ。きつとそこからなのよ。始めをしないで、終わりを書くなんて……わかってない。

と、原稿を差し出し、

里村 「書き直しです」私が編集者ならそう言うわ。

僕 ……そうか。

と、原稿を受け取り茶封筒に仕舞い、財布を取り出す。

里村 お酒の代金だけでいいです。

僕 いや、それでは—

里村 それでいいんです。

黙ってお金を差し出す僕。それを受け取る里村。

僕 ……ごちそうさん。

里村 ありがとうございます。

店を出てゆく僕。

それを見送る里村。

笑い声。

(里村の創造として)階段を下りてくるトシ。カウンターの文芸誌を取ってテーブル席へ。目を輝かせて読み始める。

里村 きつとトシちゃんも楽しかったし、幸せだった。……同情されるだけのお話にはしないでくださいね、先生。

二階から女将が降りてくる。

女将 あら、里ちゃん。まだ居たの？

里村 帰るところです。

と、女将に近づき、

里村 これ。今日の分だけですけど。

と、お金を渡す。

女将 先生が?! あら、珍しい。雨が降らなきやいいんだけど。あ、ごめんね、ご苦労様。

里村

と、お手洗いに入ってゆく。
失礼します。

笑い声。

トシ

はーい。只今！

と席を立ち、階段口へ向かうが、すぐに戻って来て文芸誌を大事に
手にとり、カウンター内に仕舞ってから、

トシ

今行きます！

と、階段をドタバタと上がってゆく。

里村

結局、いつもの時間だ……さ、帰ろう。

と、店を出てゆく里村。

F
I
N

原作『眉山』太宰治（1948年）

無断での転用・転載、上演禁止